



○二月二日、南京ヘト、無湖ヘノ中間ヘニ上陸。農家ニテ分隊炊事。降雪。曉部隊長ノ叱責。四日繁昌縣荻港（上陸）晴、部隊炊事。五日タイツヘ大通上陸、分隊炊事、降雪。六日安慶上陸、トタンニ空襲、分隊炊事、雪、夜出航セズ。七日上天氣、交付所ヘ使役、迎江禪寺、夜出航セズ。八日晴天、分隊炊事、三日目ニ出航。九日某村上陸。十日某村ヘ揚家濟上陸、夕頃ヨリ降雪、此夜坐礁ノタメ予定ヨリ遅レ、十一日モ九江ニ着キ得ズ、某村ニテ炊サン。十二日九江着。兵站ニテ受給ヘ支給品を受ける。見習士官殿ニ随ツテ外出、饅頭一二〇、〇〇円ヘ百二十円〇〇銭の意、燒そば一〇〇、〇〇也。夜降雪。十三日朝、旧曆元旦、年節休業ノタメ苦力代リニ船荷上ゲ使役、午後ヨリ又使役。夕刻乗船ノタメ宿舎ヲ出タトコロ逆戻トナル。或ハ毛布切事件ノタメカ。室変更、新ニ寝具受領。十四日大雪。早朝ヨリ梱包上ゲノ使役。午後出發シタガ又モヤ中止トナリ空シク戻リ、又々部屋ヲ替ヘテ宿泊。十五日未ダ降雪止マズ、寒サ甚シ。十六日午後、今貨物廠前ノ川辺ニ待避シツテ廬山ニ向ヒナガラ之ヲ記シテキル。今日朝來使役、午後亦使役、空腹々々。夕刻薪運搬ノ使役ヨリ滯レバ出航準備、将ニ毛布ヲ返納セントシテ中止トナル。夜安部分隊長ヘ阿部正氏カト長談。十七日快晴。南京出發以來初メテノ好天。扉ノ傍ニ足ヲ延シナガラ虱取り、へすごい虱だった。忘れられない。長閑ナ気分ヲ味ツタ。内地ノ四月初頃ノ気温。地ニハ雪ヘはだらゆき、ガ残ツテキルガ、空ニハ一点ノ雲モナイ。霧ガ鳴イテユク。スグ前ノ荒廢シタ大成殿ヘ孔子廟、モ、爆破ノ跡モノノママノ民家モ、今日ノ気分ニハ何等ノ障リトモナラナイ。警報。千人針腹巻、御守共ニ便所ニ落ス。十八日空襲二回。使役土木工事。十九日空襲二回、使役前日同様。二十日著事ヘいちじるしいことナシ。二十一日快晴、見習士官殿ニ随從シテ外出、食パン等ニ満腹、為ニ所持金一切ヲ費消、



今日十数日目ニ初メテ下給サレタ旭光一箇ヲ金ニスベキヤト思ツテモミタガ、金銭ニ拘泥スルヲ濼トセズ、道ニ封ヲ切ツテ一服、快哉。二十二日終日洗濯、日夕点呼後集合ヲ命ゼラレ、貨物廠へ急行シテ爆破ノ後始末。大豆、蚕豆ノ取除作業。既ニ大半ハ灰トナリ、臭気粉々、徹宵シテ七時過兵<sup>詰</sup>帰着。貨物廠デ作業中、指揮者ノ某中尉殿ヨリ注意ヲ受ケ内平部隊ヲ酷評サル。叱責セラレナガラ何等ノ実感モ起ラナイ。二十三日就寢点呼へ寝ながらの点呼、終日使役ナシ、外出シタカツタガ金ガナイノデ辛抱スル。二十四日雨、春ノ雨デアル。盧山<sup>へ盧</sup>ノ雪モ融ケルデアラウ。今日カラ内平隊全員ガ兵器廠ノ待避壕構築作業ノ使役ニ行ク筈デアツタガ明日ニ延期サレタ。斯様ナ命令ガ来ル分デハ船ガ何時出ルトモ想像ガツカナイ。コンナトコロデ使役バカリシテキタノデハ何ニモナラナイ。早ク原隊ヘト思フガ今ノ状況デハトモ遼江デキヌラシイ。次カラ次ヘト機雷ニ触レテハ船ガ沈ム。行軍スルニハ小部隊デハ途中襲撃サレル。コレガ占領八年モ九年モ経ツタ地方デノ實際デアル。全ク情ナイト思フ。

○同分隊の見習士官殿が買ひ求めて来られた現代傑作小説集の中から、題材故に芹沢光治良の「眠られぬ夜」を選んで読んでみた。一インテリ青年が応召し、一年余戦地に在つて遂に戦死するが、それが入院中書き出した母宛の体験談の遺稿と云ふ形式で、単に応召後半月程の記事で中絶してゐるが、観念上の戦争から戦争の実相の中に身を置く心の推移、教養の違ふ戦友達に対する融和の過程等、よく克明に描かれ、同様の境涯に在る自分の如き読者にとつては興味深く——と云ふよりはもつと真剣な気持で之を受け容れる事が出来た。主人公は何処にあつても正しく生きる事を願ひ又生きぬいたらしい。自分もしか願つてゐるが、生きぬけるだけの自信がなくなつてゐる。自責の念も鈍り、環境を批判するだけの神経も麻痺してしまつた。軍人生活の中から自分を肥す養分を

吸ひ取らうとする心の張りも何時の間にか弛んでしまった。軍隊にゐる間はまるで自分の生活とは別なものであるかの如く感じられる。これでよい筈はない。然し今の自分は、墮落した事を知りつつそれに染へなじんでゐる或種の人間の如く、起ち上るだけの気力は勿論、意志さへ失くしてしまつてゐる。

○今日は兵器廠での作業の第三日。昨日と同様紺碧の快晴。竹藪の中での作業場では時々鶯の聲が聞かれる。内地の春を思つては二年前の賀名生へあのうゝ行へ岡本和氣子・田中千美同行ゝがしのばれる。もう支那の梅が咲いてゐるかどうか知らないが、暖さは内地の晩春頃、裸で働いて尚汗をかく位である。これが大陸的へ性ゝ氣候と云ふのだらう、朝晩いくら冷くても、太陽の直射光にあたれば暑い位である。作業は兵器格納庫の構築である。九時から五時半まで、酷使と云ふ程ではないが、蓋盒へふたごう・飯盒のふたゝ一杯足る足らずの食事と、風と狭さとに攻められての睡眠不足とで、疲労が甚しい。身体の鍛練と思つて、分隊中では最も張り切つてゐる自分だが、兎角すると不平の気が頭を擡げてくる。(二、二七)

○三月二日、雨中ヲ九江病院へ行き齒科治療ヲ受ケタ。毎日砂飯ヲ食フ所為へせいゝカ、応召ノ時早急ニ填メテ貰ツタ奥齒ノセメントガ脱レタノデアル。コノ日公用証ヲ貰ツテノ外出ダツタガ、自分ニシテハ最初ノ公用外出デアル。

○兵站の風、ここでの風程ひどいのは初めてである。夜もろくろく眠れない。かき出せばきりが無い。毎日二度三度風退治をやるがその度毎に十匹二十匹の戦果は必ずある。毛布が全く風の巢になつてゐるので、毎日この退治を欠かすことが出来ない。へ毛布は毎日返納し、又受領する。



○既に三月。南京を出てから一月以上になるが、九江出発の事は混沌として未だ決定を見ない。今まで乗つて来たライターをここから戻すことは決つて、糧秣は兵<sup>ち</sup>運んで来た。大体元氣なものは漢口まで行軍するらしいが、別の船が出ない訳でもないので、各人意向を決めることがむづかしい。今日のところ、氏平隊へ前記内平隊のことへは解散するとかの話が出てゐるが、はつきりした指示はない。紀元節は原隊でと思つてゐたのが外れたばかりか、陸軍記念日へ三月十日へは勿論、この分では天長節へ四月二十九日へもおぼつかない。(三、四)

Hunger is the best sauce. 空腹は何よりのこちそう

○三月八日、遂に九江出発。兵站デノ想出ハ風ト使役。今マデノ二分隊ハ解散シ、新ニ一分隊ノ月館班長ノ下ニ入ル。同僚ヘの平野古兵殿ト西田へ西田忠氏、長崎県人へ他ノ五名ハ四分隊ニ入り、残り二名ハ残留。旧分隊程種々ノ意味デ良イ分隊ハナク、隊長安倍正上等兵へ前出。阿部正氏へ殿ハ今マデツキ合ツタ上級者ノ中デ最も好感ガモテ、心オキナク話合ヘル人デアツタ。此ノ日四時半起床、六時出発、郷洲大尉ノ指揮下ニ就ク。行程十里、十九時瑞昌着。入院下番者組ノ中村、山下両隊ハ落伍者続出、自分モ相当苦シカッタガ元氣ニ歩ク事ガ出来タ。マメト股ズレニナヤム。第二日へ九日へ又十里、某村ニ到着。此ノ日遂ニ落伍。午前中元氣ダツタガ、二里程手前ヨリ急ニ疲労甚大、夢遊病者ノ如ク人ニ後レテ続行へ続行しなければ生命がない。既ニ此ノ日ノ行軍ニハ安倍上等兵殿等五名ハ参加セズ、瑞昌ヨリ九江ニ引返シタ。コレノ方ガ良カッタカモシレナイ。兎ニ角此ノ日デ自分ノ身体ニ対スル自身ヲ失フ。治道ノ景、昨日ハ平坦地ダツタガ今日ハ丘陵地、正ニ内地ノ景ニ等シイ。鶯声、キヂ。第三日(十日)余リニ落伍者多イタメ、大尉ノ指揮下ヲ離レ、山下隊ト共ニ残留、休養。タニシ取り、

芹搦へせりつみ。第四日へ十一日、七里、木石港泊り。第五日へ十二日、六里、陽新着。途中農家ハ悉ク破壊、耕作者ハ兵隊ノ姿ヲ見ルヤタチマチ何処カヘカクレテシマフ

宿泊地付近ニ於ケル帝國軍人ノ行動ハ略奪行為、及ビ其ノ行動ヲ必須ナラシムル給養ノ状況。

逃亡ノ農夫ニ石ヲ投ゲタル一事実(逃ゲルモノヲ追フ本能)行キ違ヘル小童ニ対スル一下士官ノ行動ハ何だつたか。

第六日へ三月十三日、休養。桜ノ蕾、柳ノ芽吹き。日班長ニ対スル嫌悪ノ情。第七日へ三月十四日、白砂浦へ大治の南へ泊。此ノ日朝来雨、冷風、元氣盛。第八日へ三月十五日、朝小雨。約六里ニシテ大治へ鉄山で有名ニ至ル。兵站泊、夜大雨。第九日へ三月十六日、大雨、休養。第十日へ十七日、夜中十二時飯上ゲ、三時起床、四時出発。泥濘ニ煩フ。行程十二里、頸城ニ入ル。疲労甚大、昨夜一睡モ出来ナカツタニヨル。第十一日へ十八日、四時起床、五時出発。十里、葛店へ鎮へニ入ル。三時頃ヨリ降雨。第十二日へ十九日、小雨。途中宿泊ノ予定ヲ変更シ、一氣ニ武昌ニ向フ。里数十二、武漢大学ヲ經、田梓琴墓、宝通禪寺ヲ傍ニ見、午後五時頃、碼頭近傍ニ到着。ココニテ中村小隊解散。山下隊ト共ニ出発時二百名ニ近カツタモノガ、今ハ僅々五十名。ココニテ西田、浅野トモ一応別レ、单独宿舍ニ到リ、南班長指揮下ノ樞部隊ニ加ハル。へ浅野氏は次に本人の筆で、

○「統」又ハ「呂」第二一四七部隊 宮城県仙台市東町八 朝鮮平安北道江界郡満浦邑鉄道官舎四〇ノ一 浅野兵一へと記している。しかし氏に関する記憶皆無。



一九三七(昭和十二)年 二月 十三日 午後、聖護院局消印。はがき。

佐藤春夫の「わが一九二二年」を買ったから一度見に来たまへ 有名な秋刀魚の歌や杏の実をくれる娘等がある岸田劉生の装釘で感じのいい、本に出来てゐる ヘドストエフスキーの悪霊は全部読んでしまった 全部読んでしまはねば良さの分らぬ小説である

二月 十五日 付、十六日消印。手紙。巻紙に墨書、淡彩画二点。

今朝 手紙を拝見した この前に一通かなり長いのを書いたのだが 手ぢかに封筒がなくて ぼつておいたものだから つい出しそびれてしまった 重要なことは何も書いてなくて ただ何日へ何時もの様に寝言をならべたのではあるが 悪霊の批評(?)を少し書いてあつた 散漫なものではあつたが 自分自身に影響した所が可成多かつたので ちよつと書いてみただけだつた

今度の手紙で 君はよほど興奮してゐるらしいが その原因は——こんな想像を許してくれるなら——恐らく生理的なものではないかと思つたりしてゐる 性慾の一つの表はれとでも言つた怪なものではないだらうか 君の気持なり状態は一度 細胞結合行為をなすことによつて救はれると思ふ ゆめゆめ怒り給ふな

ピアズレイの様な顔をしたひとなんかに注意をむけたりするのはよくない そんなのは性にすれつからしたもののする事で不自然なものだと思ふ

僕は君に 健康な女性と恋愛することをすゝめる 君の病的な思想はそれで解消すると思ふ 人間の一番い、



ソースは恋だらう 野卑な  
言ひ方だが人間も動物だか  
ら仕方がない

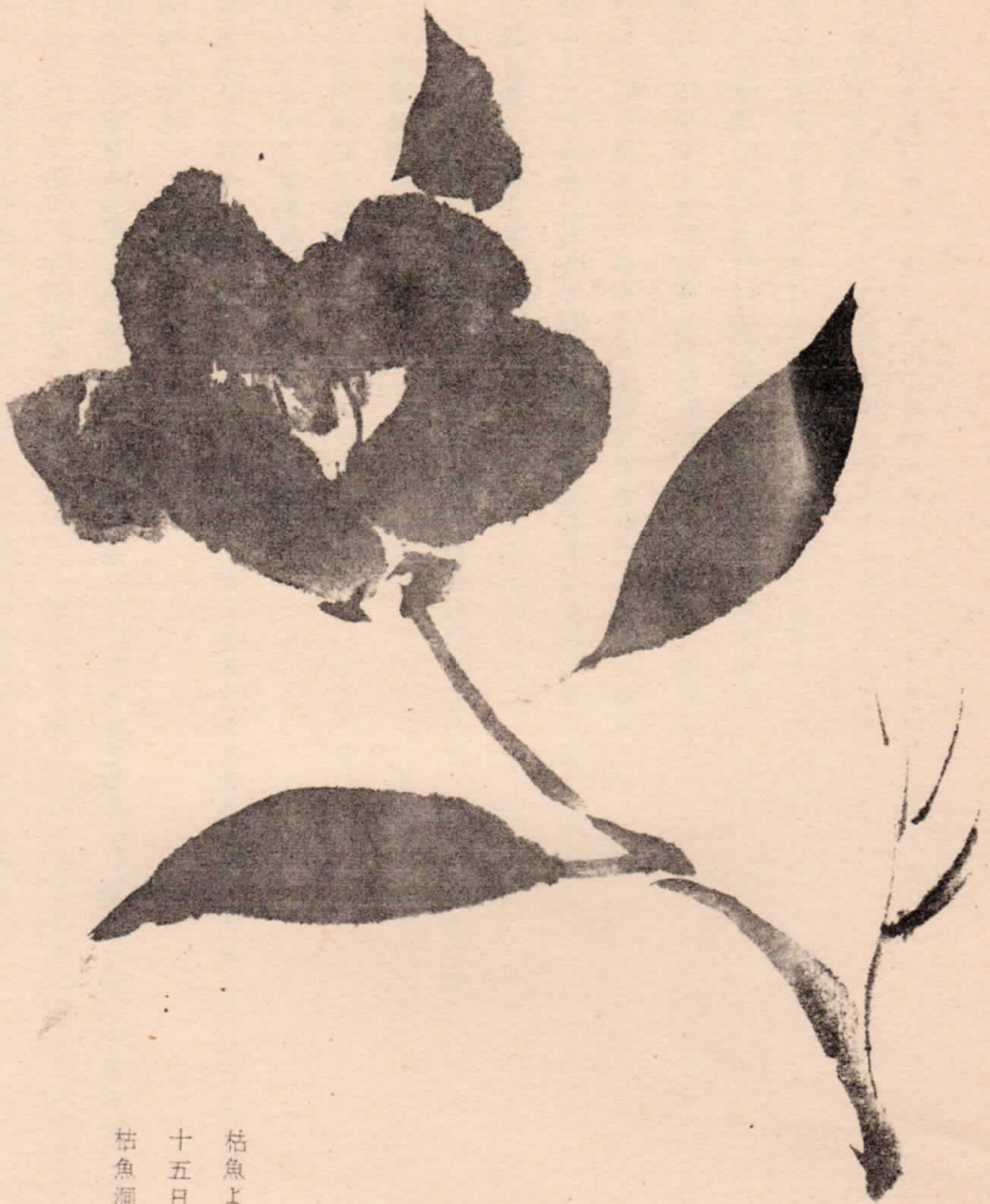
はなやかにさびしき秋や千  
まち田のほなみの末をむら  
すすめたつ 白秋

古代錦の様なこの歌 僕の  
すきな歌だ

さにづらうへふゝ丁字の花  
にまひるまはうらうらなれ  
や日おもての庭 曠平

日おもての櫓の花やあかね  
さす陽をいつばいにあびし  
くれなる





枯魚よ 笑覧あれ  
十五日午后 暇平  
枯魚洞主人訊下

二月二十日 午後消印。はがき。

もうそろそろ試験と思ふが其後如何。小生先日来より 仕事が出来ずに 弱つてゐる。風邪はひかない様だが何事も停滞しがち。

日活映画蒼氓をみた。非常な傑作だから暇があれば一度みておき給へ。今度の歌会へはどうする？ 僕はあまり行きたくないがとにかく行つてみることにする。

『水鏡』三月号の森田作品。

微恙流離

波よする近きなぎさは／けふの日のわれのころぞ  
―佐藤春夫―

沖遠く流るる潮の黒潮のさわだちゆゆし冬空の下

日おもてのみかん畑をのぼり来て見渡せば入江の潮の豊かさ  
ばつてらを漕ぎて子供のうたふ唄雨の漁港のたそがれ時を

朝床に目覚めてきけば港をばボンボン蒸気はいでてゆくらし  
十方に潮高なるや茜さす昼のなぎさにおりたちけり

茜さす昼のなぎさに波よせて十方晴れの海のががやき

岩代結松遺跡

松ケ枝を結び給ひてなげかしし有間の皇子（みこ）ときけばかなしも。



まさきくと祈りたまへど再びは帰り来まさん道ならなくに

潮の岬

みんなみの旅のきはみよ人のいふこは串本向ひは大島  
あらはなる岩のこぞりにおし来る海はをどめり空のま下に

捨離抄

独りゆく雨の港のかなしさよ潮は豊かに満ちて干なくに

夕潮は満ちてやよらめ磯にしてわが心はもきはまらんとす

船のゐる夜の波止場に太笛のながながりぬ又もあはなくに

岫（へさき）より分れる水脈へみをやうたかたのやがては見えず人の恋ほしさ

岬より船のまはれば人の住む灯（あかり）は見えず太笛の音

夜ふかく傷心捨離のわが心船は岬をまはりけるかも

海一つ越えても来つれ舞々へひしひしとこのせつなさにわが堪ふべしや

同じ月の原田の詠草から少し抄出しておこう。

漁夫（あま）の村の浄土の寺にうら若き女のをりてヂヤケツを纏みをり（大崎）・綱引（あびき）するあまの

男らものいはず印南の海は昼がすみせり（印南）夜ふかき朝来（あつそ）の歌の改札口に子供三人佇みてみし

（朝来）朝なきの周参見の浜に人立ちて白き家鴨を泳がせてゐる（周参見）

二月二十八日 夜付、三月一日消印。手紙。巻紙に墨書。

ハガキありがたう 試験で忙しいことと思つてゐる、僕も毎日籠居して倭絵の模写や写生で日を暮してゐる、歌は宝池のを少し作つたが見てもらふ様なものはない そのうめあはせに（埋合せと言つたら甚だ失礼だが それ程この歌はい、のだ）わが敬愛するへ木下、利玄の挽歌「夏子に」を抄出してみる、非常に長いもので、どれもこれも泪なしには読めぬものだ、恐らくへ斎藤、茂吉の死にたまふ母に匹敵するものであつて優るとも劣らぬものだと思ふ 夏子嬢は利玄の長女 二才で 別府温泉滞在中死亡 尚この以前に二人の子供を亡つてゐる

夏子に（抄）

ふなばたに吾子おもひをれば眼に揺れて暁海（あかつきうみ）の波は蒼しも

（曠曰 利玄旅行中に夏子の恙を報しへじ、来り急ぎ別府へ向ふ途中）

真夜中を戸外（そと）にすさべる風の音わが子よ父はここにゐるぞも

金輪際なくなれる子を声かぎりこの世のもの呼びにけるかな

おぎろなし子と父母と一心に慕ひあひつつ死にわかれけり

わが妻も今は泣きやめしみじみと銀杏が黄なりと言ひにけるかも

吾子のことを可愛がりくれし隣人よその子死なせて今かへり来つ

（曠曰 病院より帰りたるなり）



いとし子を焼場にやると親さびて好みし着物をきせにけるかも

黒塗のあやしき車吾子のせて山へ山へと行きにけらすや

隠亡は今火を入ると籠の中の吾子にむかひておらびけらすや

夕空に立つ煙突にわが夏子けぶりとなりてなびかひ行くも

冬の夜の東京駅に骨つぼの白き包もち下りたちにつけり

みごもれるほどもおとなしくわが妻に女(め)の童らしと云はれし子はも

知らぬ人に抱(いだ)かれてさへむづかりしめくしきものよ死にてゆきけり

をさなければしきみへ原漢字の花にとりそへてよき色花を手向けけるかな

これやこの三人の吾子の墓どころ土のしめりに身をかがめけり

以上

枯魚大師

於夜来山房 蕪春山人

蕪春は不精也 蕪樵より春がよきと思ふ 如何

三月二日 午前消印。はがき。

おはがきありがたり 色々書きたいが今日は少し忙しいので次にする、君はこの頃何へどこうかしてゐるが  
一君は詩人でないといふ考へを捨てなければならぬと思ふ 詳しくは次に さよなら

はがき連句・デールヴォー

水原田昌雄  
六原田憲雄  
櫟齋

こ、しばらく暖い日がつづきますが暦のうへではきのふが立冬とのことでございます。

デルヴォーの裸女あらはれよ青写真

氷六

この前の「紫陽花」の尊句は夏ですから、季は丁度つり合ふともいへます（句は仲々及びませんが）。「青写真」は季語としては新しいものと思ひますが御手許の歳時記では取り扱つてをりませうか。遊びとしては、もうはやらないものでせうけれど、小さい頃は駄菓子屋にあつたやうに覚えてをります。又、しばらく御付合をよろしくお願ひ申上ます。一九八三年十一月九日 氷六

先月二十七日お電話の後お便りなく、ご多忙かと思つてをりました。そこへ「アッ」と驚く発句。文字通り二の句がつけないのですが、子供の頃よく擲つた青写真を思ひ出しました。花園へ引つ越した友だちを訪ね、昼間でもあまり人影のない駅のフォームに勝手に出入りし、日向で坐つてゐたことがあります。一九二〇年ごろまでのベルギーの田舎の駅も似たやうなものだつたでせう。わたしたちの方は、裸女のことなど思ひもよらず、たわいな話をしてゐたのですが。といつた次第で、

少年ふたり駅の日溜

樗斎 十一月十日

賓客の籬に茸ははちきれて

氷

もともとは「茸」で発句を作るつもりだつたのが、あ、いふ突飛なものになつて了つて、御迷惑をお掛け致しました。それを、最上の句で受けていただきましたので、こちらも第三の転じ方にて御返礼申すべきところ、発句のた、り、「茸」の語のたえざる耳鳴り、はては五句目の「月」への目配りにさへられて氣品なきま、の句を、



タイム・リミットもあることなれば。 十一月十三日夜半、 六

今日はよいお天気です。先日、家内の里に行つたら、このごろは山も乏しくなつてと、小指ほどのを見せられ、速慮して帰つたのですが、第三で豊かな御馳走になりました。お返しが貧弱で恐縮ですが。

こぼれし音を譜にかきあつめ 櫟

あなたの耳にたえざる荘麗なフーガの余音をかき集めて、とも、街頭の雑音をかき集めてとも。茸好きの高橋達明氏は、ジョン・ケージの茸についての好エッセイを書きましたが、あなたも茸好きとは思ひもありませんでした。さて、どんな月が出ることでせうか。 十一月十五日 櫟

前便、四句目の拙句、あまりにもふつつかですので、

空遠くゆく色鳥の声 櫟

と改めたく。これとて貴吟にふさはしいものとはいへませんが。今朝の寒さに風邪をひいたらしく、大事をとつて午後から臥せつてをります。この程度の臥床は、ふだん読めなかつた本を乱読する好機です。杉本秀太郎氏の『西窓のあかり』に、松茸が気楽に食べられる世の中になつてほしい、とありました。 十一月十七日 櫟

岬より今しも月の浮くがごと、 六

「こぼれし音を」の句は、音符の交錯するさまが眼に見えるやうで没といふのも惜しい気がしましたけれど、四句目としては面白すぎるのかも知れません。こゝで遣句はやはりうれしく（色と声とで少し惣ばつてゐるとは思ひましたが）、次の月をどの景中に出してもいい、ことになりました。結果は、「岬」の語を出したに止つて了

ひましたが。御風邪、ご無理なさいませぬやうに。小生は冷たい風で手の甲に湿疹が出来て参つてをります。

十一月十九日 六

十九日、やむを得ぬ用件がかさなり、責簡をいただいた二十一日、尊吟の「月」さながら体温浮上、うつらうつらとしながらも寝たり起きたりの日々で、二十四日やつと用件ひとくぎりつき、ぐつたり寝込みました。けさの夜明がたふと一句。付き過ぎる気もしますが、あまりお待たせするのも申訳なく。

眼路のかぎり海は輝く

櫟

熱の方は平常にもどつたやうです、他事ながらご放念を。

十一月二十五日朝 櫟

この石はもしや化石と取りなほす

六

最初拝見、景が三句つづくことになるのではと思ひましたが、よく見ると「眼路」とあるので、こゝに人の気配を感じることが出来る訣だと思ひ返しました。ダーウィンのやうな博物学者が航行中、と想定したのです。「取りなほす」は少し定まらないやうですが、このところ連日時雨れて、その後は特に冷込みます。御自愛下さい。

十一月二十六日 六

裏移りで拙句の運澁を巧みに転換していただき、ほつとしました。

スフィンクスにつらき恋して

櫟

尊句が博物学者ですから、こちらは若い女性考古学者、といつたところで付けてみました。風邪でねてゐたとき木々高太郎の推理小説「彼の求める影」を読みましたら第五章が「スフィンクス・コンプレクス」でした。青



年のコンプレクスですが、面白いのでどこかで借用したいなと思つていたら、貴吟に「化石」とありますので早速。ミイラ取りがミイラになつたみたいで笑はれさうですが。湿疹はいかが。十一月二十八日夜 檄

記念切手しめらす舌の美しく

六

前句が女性だといふことは句の表に出てゐないやうなので、それを補足したいと思つたのでした。「化石」「スフィンクス」と枯渴した感じが続きましたので「しめらす」を出したのですが、恋の気分は少し乏しいのかも知れません。一応、表向きは「恋文」で付けたことになると思つてをりますが、如何でせうか。手の甲は大分良くなりましたけれど、まだ少し見苦しい痕が残つてをります。火傷をしたやうにも見えます。十一月三十日 六

集つてくる胸毛刺青

檄

貴吟すこぶる艶美、拝見してすぐに二、三の句が浮かんだのですがいづれも異国趣味で、打越のスフィンクスに嫌はれさうですから、右のやうなことにしました。してみると、胸毛や刺青の記念切手はないだらうな、といつた愚劣な感想がうかび、三島由紀夫を郵政大臣にしなかつたことが残念。冬になると、寝床があたたまるにつれて背中一面がおそろしく痒くなります。何とかといふアレルギーで、たぶんあなたの手の甲と似た状態なのでせう。十二月三日 檄

弔ひの列に火を吹くマシンガン

六

ギャング映画風に。余り取り澄ましたやうなものばかりでは面白くないといふ御意向が貴句に出てをりますので、こゝらで一騒動を起しておきます。或ひは、より適切には、巻きこまれたといふべきでせうか。句は拙劣な

もので、丁度小生の字と同じく分りやすいだけの取柄です。へ執筆曰く、水六氏の文字は活字のごとく端正、傑  
齋のはナメクチの這ひたる跡のごとし。この春から風呂の度に水を浴びてゐますが、最近は大張きつくて、「な  
むあみだぶ々々々」とつい思はず他宗派のものを唱へたりもします。 十二月六日 六

浅間の嶺になびく夕雲

傑

血湧き肉躍る貴吟、大いに感嘆。そのあとには曠野の決闘か何かのラストシーンが反射的に思ひ浮かぶので  
が、旅はまだ中ばにも達してゐない。「火を吹く」から三宅島を連想するのですが、次の「月」を思ふと、また  
岬から出していたくのも恐縮。といつたところで、甚だ平凡な拙句となりました。美しい文様を置いてくださ  
るための地、とお許しを。十月のなかごろからサンスクリットのテキストで楞伽經を眺めてゐますが、二十行ほ  
どが臘氣ながらといつたところです。 十二月九日 傑

木地師らししみじみ古茶をめづる月

六

以前作りました拙吟に「月出づる裾野へ人の月円か」といふのがあつて、これが実は浅間から出した月。手だ  
れならぬ身には仲々同じ処から出だすことは叶はず、つい端のはうへ追ひやつて了ひました。貴句は、火一煙一  
雲の連想でせうか。茶鼠の煙とみるよりも、銃口から立ち昇る硝煙が消えさらずにそのまゝ、「夕雲」となつたの  
であるらしい。 十二月十四日 六

夏の蝶追ふ女童ぞ疾き

傑

茶鼠の煙は浅間神社でお払ひして……といふところまでは考へなかつたのですが。木地師の古茶でさつぱりし



たところへ、まだ出て来なかつた虫を入れたいのと、女性を入れたいのと、こんなことになりました。下句ははじめ「脚絆やさしき」だったのですが、打越に旅の面影があるやうな気がして、変へました。凡句の連続で申訳ないので。鈴木漠さんから連句集『壺中天』をおくつて頂きました。さすが詩人ばかりの連衆で、見事なもの、舌を巻いてみます。十二月十五日 櫟

野に一つけふもありけり車椅子

六

前回、月を夏にするために「墓蛙」か「毛虫」と抱き合はせにしようと思つてゐたのですが、「月に墓蛙」は秀句が既に多くあるやうであり、少し前の朧毛に気付きましたので、いづれも果せませんでした。その「毛虫」が、貴吟に「蝶」となつて現はれた不思議さのいさ、か驚いてをります。「女童」には夢か幻かと思まがふ、何か不在感のやうなものがあり、拙吟はそれを承けました。「壺中天」は小生も数日前に手にしました。それについてはいづれ後日に。十二月十九日 六

虚妄の正義まき散らしつつ

櫟

素材がみなリアルでありながら、全体の感じが全くシュル・リアルなものを、北欧の写真家の作品集で見つたれたことがあります。あなたのこんどの句がやはりさうだと思ひます。ところでこの間の教週のさわがしさがまだ耳にがんとしてゐて、そいつを吐き出さずにはをれぬ年寄りの頑固が変なところで洩れ出してしまひました。おはづかしいことですが、車椅子が街角で急に転回した、といつた趣きで、麗はしい花景色を楽しむことに致します。十二月二十一日 櫟

先日は思はぬ御款待にあづかり、楽しい一夕を過ごさせていただきました。処で、拙宅に戻りましてからも花の句をさまざまに考へてをりましたが、「散らす」のは一寸シヤクでもあり、「アドバルン」など揚げたところで、直ぐに濁み、仲々句の成らぬま、土・日はいたづらとなりました。「花盗人」を句に仕立てただけのものですが、花は折られて、散るよりも非道いことになつて了ひました。十二月二十六日 六 へ次号につづく

※前号の「はがき連句・秋風」の脇句「雁の寄る湖」は「雁と寄る湖」の誤り。名残り裏の花の座の作者を「すなわち山本のぶを氏としたのは「達」すなわち高橋達明氏の誤り。挙句の作者も、高橋氏ではなく、山本氏でした。訂正して、両氏と誹者各位におわびいたします。(憲雄)

親子連句・蓮

花

原田

道め

ぐ

子み

初オ あせ道はれんげの花のもうせんよ

道子

舟こいで月を迎えにゆこうかな

父

スキップしながらやって来たヒナ

父

父さんといっしょ焼き栗ぬくい

母

春の音ぼんぼり二つ灯を入れて

母

ウ 母さんと片付けおわる屋風機

道

海の見えてる小坂を下りる

道

あとはテレビの恋物語

父



植木鉢に四つ葉のクローバー揺きて待つ 母

白い徳利に番茶をくんで 道

禁酒した爺さまの膳のたのしげに 父

まがきめぐりて踊る子すずめ 母

夏の月よこにちょこんと星ひとつ 道

鼻のあせもに弱る弁慶 父

竹園はく素足いなせな紺のれん 母

いななきながら走り去る馬 道

ワシントンに日本の花の咲きさかり 父

枝伐つ深山わたる春風 母

名オ 野の川におたまじゃくしの合唱団 道

聞いているのは原田の三人 父

不意に来て町驚かし行くパトカー 母

どの影もみなこわいお使い 道

びわの花やさしい門をくぐりぬけ 父

障子しめたる庫裡の静けさ 母

台所失敗物の山となり 道

明日のデイトにそわそわとして 父

宇宙飛行軌道点検いま一度 母

漢字のテストは百点満点 道

いとど住む床下までも月明り 母

雁来ぬ池に穂蓼わびしく 父

ウ 遠い山まっかな紅葉あふれ出し 道

ビエロの列がしずしずとゆく 父

ビルの窓小さく光る雨あがり 母

どこかでショパン弾く音がして 父

初受験パスしたゆめの今朝の花 道

塀の向うに藍の苗売り 母

興行 一九八三年六月五日より

一九八四年一月三日まで

南唐は、五代十国の一つ。始祖は呉の丞相徐温の養子である李昇(り・べん)。呉の譲りをうけ九三七年帝位につき国号を唐といい、金陵(いまの南京)に都した。揚子江下流域を領有して富裕をきわめ、文化は栄えた。第二代皇帝が李璟(り・えい、九一六―九六一)、学問を好み才芸に長じ、寛仁であったが、後周に敗れ領土を奪われ、洪州(江西南昌)に都をうつしまもなく死んだ。在位十九年。中主とよばれる。第三代が李煜(り・い、九三七―九七八)、九六一年、金陵で位につき、在位十五年、九七五年、宋に降り、九七八年死んだ。宋に毒殺されたのだという。後主とよばれる。後主も中主に似て寛仁で、学問を好み、ことに詩詞にたくみで、当時の最高の知識才芸の人であった。国を滅したため政治家としては非難されるが、わたしとしてはかれのような人物が皇帝というような地位につかねばならなかった非運をいたみたい。中主は数首の詞を遺すのみだが、作品はすぐれ、後主は詞を真にすぐれた文学に高めた人。このふたりを南唐二主とよび、その詞集が「南唐二主詞」として幾通りも刊行され、その研究も進んでいる。まず中主の作「山花子」。

真珠のすだれまきあげて鉤(かき)にかくれど／春のうれたさなかなかに部屋にぞこもる／風にはらはら散る花のあるちはたれぞ／思ひはるばる／青き鳥だに雲のへのたよりつたへず／丁字むなしく降る雨と愁ひむすほれ／かへりみすればみどり波 三楚に暮れて／天に流るる

「三楚」とは西楚・東楚・南楚をいい、江西・湖北・湖南の一带をさす。次も同じく「山花子」。



蓮のはな香り消え葉はやぶれ／西の風ふき起こるみどりの波間／あはれ景色とともに衰へ／見るに忍びず／  
／細き雨に夢さめぬ　ひととほく／小楼にすさびをはる笙の音寒く／涙しとどに恨みはてなく／おばしまに  
よる

このほかに二首あるが割愛する。次は後主の「虚美人」。

春のはな秋の月いつかきはまる／過ぎゆきしことやいくばく／小楼にきその夜もまた東風（こち）ふきて／  
ふるさとはおもふにたへず／月明かきなか／おばしまも玉のみぎりもとのまま／かんばせばかりうつろ  
ひて／きみに問ふ愁ひそもいくそばく／あはれ御たり春の江の／ひんがしに流るるに

この詞は批評家に「神品」とたたえられたひとつ。次は「清平楽」。

別れきて春半ば／目にふるるもの腸を断つ／みぎりにおつる梅のはな雪と乱れて／払へども身に満つるかな  
／雁来たれども便りなく／路はるけて帰る日の夢もむすばず／別れの恨みさながらに春の草／ゆけども  
ゆけども生ひまさる

次は「子夜歌」。

人と生れてかなしみはまぬかれがたし／わがこころとてさびしさの限りあらむや／ふるさとに帰らむ夢の／  
さめてより涙しとどに／／高楼にたれとのほらむ／忘れがたし秋晴れに眺めせしこと／すぎしことすでにむ  
なしく／はた夢のなかにし似たり

次は単調の「搗練子令」。

奥しづか／さ庭むなしく／とだえてはきこゆる砦とだえてはそよぐ風／夜の長さにもすべもなく眠れぬわれに  
／その声と月かげとすだれ越え来る

次は「烏夜啼」。

夜の風 雨そうて／すだれさやさや秋の声／枕べに消（け）のこりし灯と音をえし水時計／すわりてみれど  
やすらがぬ／世の中は流るる水のそぞるにて／なべては夢のうきよや／酔ひのくに旅路のどかにしたはし  
き／そのほかは行くにたへなく

次は「相見歎」。

ものいはずひとりのぼる西の楼／鉤に似し月／さびしあをぎりの奥の庭／秋をとさせり／鶯（た）てどき  
れず／をさむれど乱るるものぞ／別れのかなしび／といへひとすち味はひの／心にこもる

この人の作品は、挙げはじめたらきりがなく、すべてを読んでみたくなる。確実にかれの作品とされるのは二  
十首前後、駄作はない。こころにしみるものばかり。ことに国運非となり、流離の中に作つたと察せられるもの  
にすぐれたものが多い。それが李清照のいわゆる「亡国の音楽」であるにしても、亡国の悲酸をこれほど真卒に  
歌いえた帝王はほかにはいまい。清照の詞論は、そのことを言おうとして、言い尽さなかつた感がある。「相見  
」の「といへひとすち味はひの」のごとき句はほとんどそっくり彼女の作品にすくいとられ、後主の詞に対す  
る倒をうかがわせる。そうして彼女の晩年の傑作は、後主の「亡国」の声にもっとも近かつた。論より証拠、  
というが、「詞論」よりも詞のほうが彼女の詞論をよく語る。（一九八四年二月十七日）